

野鳥 会報

No.76 2013年 10月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 コバシチドリ *Eudromias morinellus* チドリ科



「寺泊の海岸にコバシチドリが来ているよ」と教えてもらっていそいそと出かけたのは初認から5日目。「ダメもと」のつもりであったが、見渡す砂浜に「おやっ？」と思う鳥が1羽いた。散乱する木屑の中を大きめのチドリがトコトコと駆けている。白い眉斑が後頸まで伸びているのを見て、思わず「いたーっ！」と声が出た。

コバシチドリを見るのは2度目である。最初は平成10年9月9日、場所はなんと立山。富士の折立の急坂を降りきった標高2,850メートルくらいの岩礫帯である。場所が場所だけにライチョウのヒナかと思ったが、嘴が違う。ムナグロに少し似て、何よりも後ろ頭まで伸びた眉斑が鉢巻を巻いたように見えるのが印象的であった。

この「鉢巻」から、それがコバシチドリであることを後で知った。観察地が高山であったことに

ついても、もともと極北で繁殖する鳥であるから、似たような環境である高山の岩礫帯にいることもありえないことではないと聞いて、なるほどと思ったのであった。

寺泊のコバシチドリはよく駆けていた。駆けながら時々立ち止まって砂を掘った。半開きの嘴を砂に刺してグリグリッとほじるように穴を掘る。砂を散らし、邪魔なゴミを取り除き、頭がすっぽり埋まるくらいの穴を掘って、砂の中からコガネムシの幼虫を引っ張り出す。こうして食べ過ぎではないかと思うくらい餌を獲っては食べていた。

この独特の採餌法から、キョウジョシギがTurnstoneならコバシチドリはDrillsandかSandsplasherというのが適当ではないかなどと思ったのであった。

(高 辻 洋)

鳥屋野潟ハクチョウ類生息状況

(2001－2012年度)

新潟市 岡田成弘・本多貞夫・本田茂夫

はじめに

鳥屋野潟（新潟市中央区）は県都新潟市の中心部に残された約170haの県内最大級の潟湖である。周辺の住宅地と湖面を隔てるように湖岸にはヨシが帯状の群落を形成し、湖面にはアサザ、コウホネなどの水生植物が生育している。秋冬期にはカモ科鳥類が多数渡来・越冬し、コハクチョウ、マガモ、コガモ等多くの水鳥類にとって重要な越冬地となっている（環境省2009ほか）。

鳥屋野潟及び隣接する清五郎潟に渡来・越冬するハクチョウ類・ガン類の生息数及び生息状況を解明することを目的とし、2001年10月から2013年3月までの12年間に渡る渡来時期（10月から3月までの半年間）に毎週生息調査を実施した。また可能な限り日中も観察を行い、越冬期の生態についても調査を実施した。本報告ではハクチョウ類について報告する。

調査地域

鳥屋野潟及び清五郎潟の全域（図1）

調査方法

ハクチョウ類、ガン類の渡来期（10月第1週

から3月最終週までの約半年）の毎週金曜日夜明けからねぐら立ちまでの間に、鳥屋野潟及び清五郎潟全域の複数の定点から湖面全域をフィールドスコープ及び双眼鏡で調査し、ハクチョウ類及びガン類の全数カウントを実施した。

調査結果

2001年10月から2012年9月までの12年間延べ300週の調査結果を集計した。調査結果の一部として2012年度（2012年10月第1週から2013年3月最終週）の集計表を示した（表1）。12年間のハクチョウ生息数推移をグラフに表した（図2、毎週の調査日は年度によって異なるが便宜上週単位で表した）。また各年度の最大羽数を表とグラフで示した（表2、図3）。

まとめ

- ・12年間の調査の結果ハクチョウ類ではコハクチョウ（亜種コハクチョウ及び亜種アメリカコハクチョウ）、オオハクチョウ、ガン類ではヒシクイ（亜種オオヒシクイ及び亜種ヒシクイ）、マガン、ハクガン、シジュウカラガンの計6種を確認した。
- ・毎年10月上旬にコハクチョウが渡来し、11月



図1. 調査地（鳥屋野潟・清五郎潟）

表 1. 2012 年度調査結果

種 \ 調査日	10/5	10/12	10/19	10/26	11/2	11/9	11/16	11/23	11/30	12/7	12/14	12/21
ヒシクイ								1				
ハクガン										1		
オオハクチョウ								5		11	12	14
コハクチョウ	8	712	280	1198	1488	2972	2407	1754	1576	1263	1007	939
アメリカコハクチョウ						1			1			1
ハクチョウ類合計	8	712	280	1198	1488	2973	2407	1759	1577	1274	1019	954

	12/28	1/4	1/11	1/18	1/25	2/1	2/8	2/15	2/22	3/1	3/8	3/15	3/22	3/29
		13	92	6	341									
	1													
	13			7	28	6	3	7	7	3				
	1666	1303	945	736	313	180	4	16	357	137				
	1								1					
	1680	1303	945	743	341	186	7	23	365	140	0	0	0	0

表 2. 年度別ハクチョウ最大羽数と記録日

最大羽数記録日	羽数	最大羽数記録日	羽数
2001年12月7日	3,276	2007年12月21日	3,754
2002年11月15日	3,275	2008年11月28日	3,849
2003年11月28日	2,973	2009年11月13日	3,735
2004年11月19日	3,589	2010年11月12日	4,352
2005年11月18日	3,650	2011年11月18日	3,152
2006年11月17日	4,048	2012年11月9日	2,973
		12年間平均	3,552

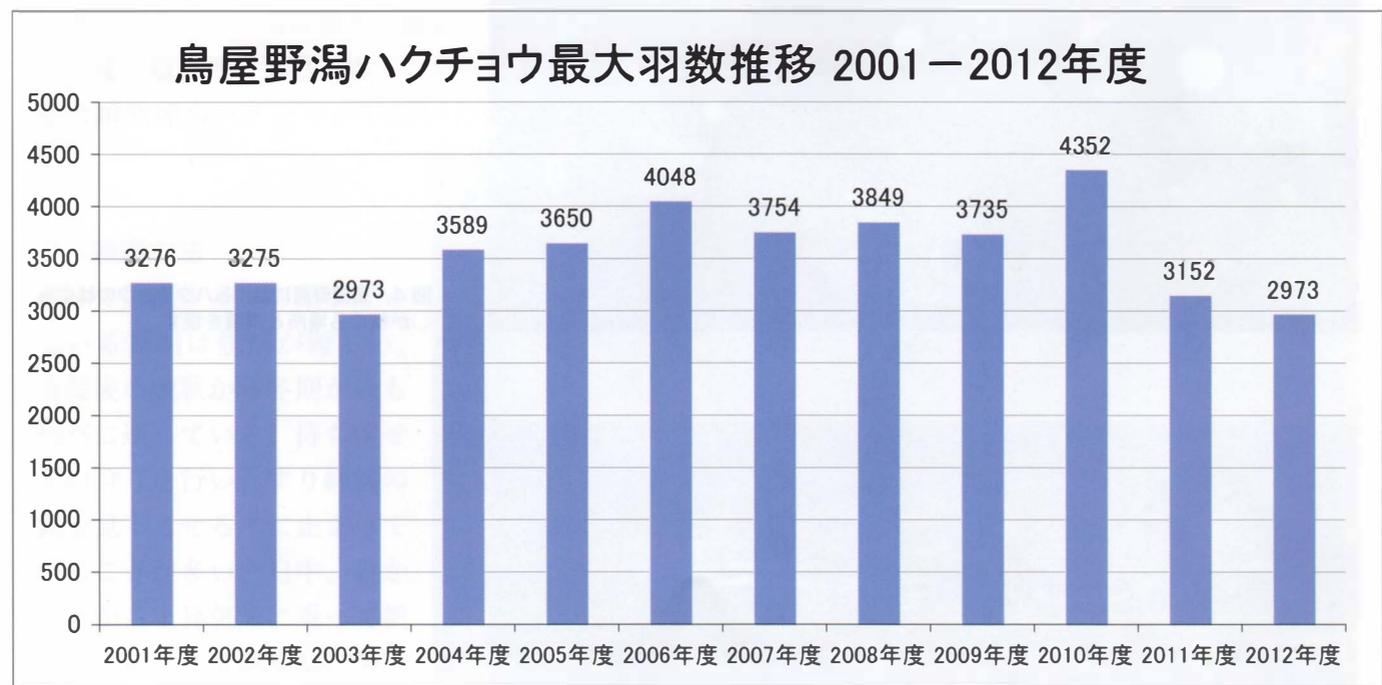


図 2. 年度別ハクチョウ最大羽数

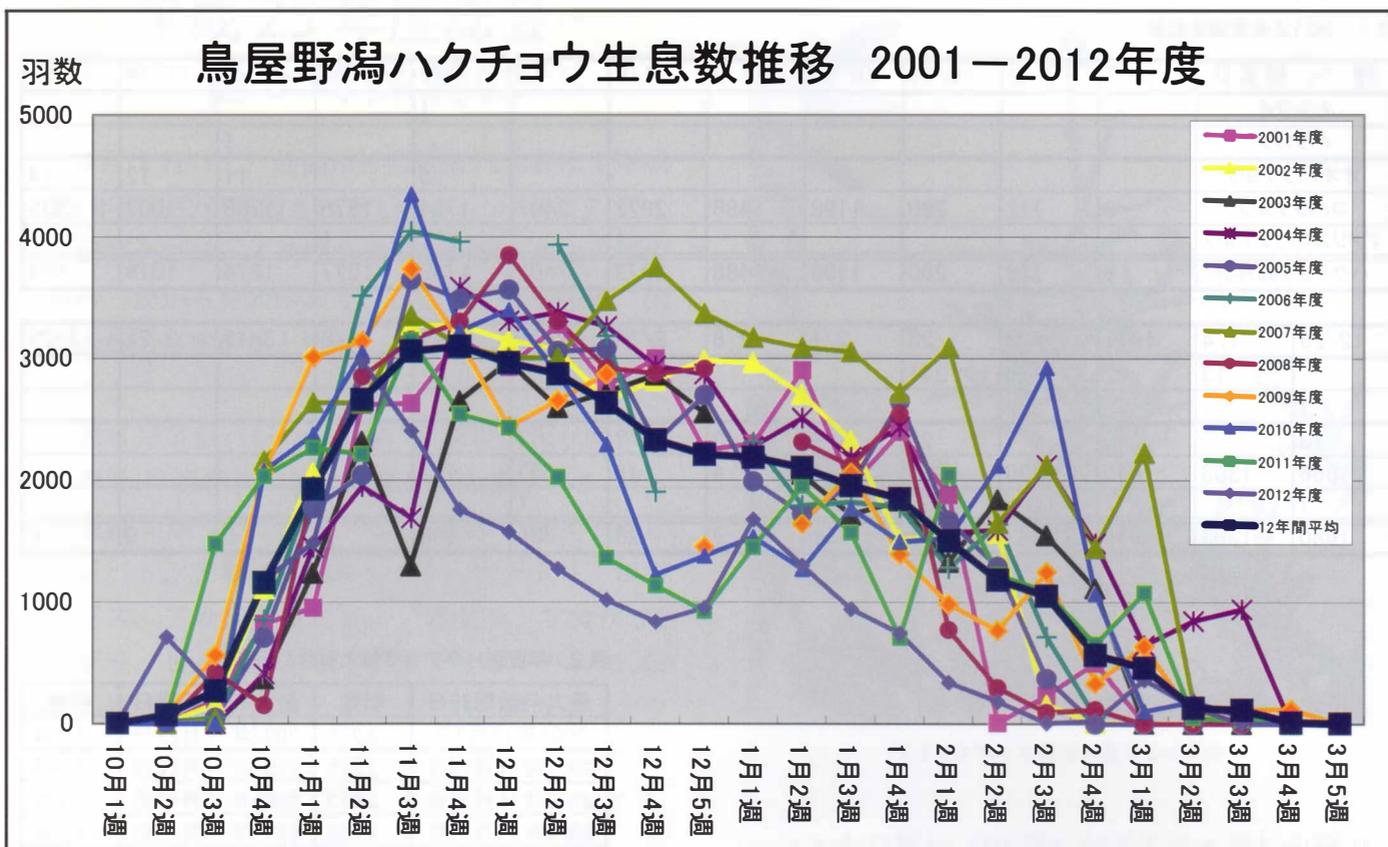


図3. 鳥屋野潟ハクチョウ週別年度別生息数推移 (2001年度-2012年度)



図4. 鳥屋野潟におけるハクチョウのねぐら
○がねぐら場所と規模を現す



図5. 最も大きなねぐら場所である上沼地区の入り江

上旬から中旬には最大羽数（約3000羽）に達すること、1月以降は徐々に減少するが年によって変動すること、3月にはほとんどの個体が飛去ることがわかった。2010年11月12日には最高羽数である4,352羽を記録した。

・鳥屋野潟に渡来するハクチョウは95%以上がコハクチョウであること、オオハクチョウはコハクチョウよりも遅い11月に少数が渡来し、鳥屋野潟弁天橋付近と清五郎潟等限られた場所で越冬することがわかった。

・ハクチョウ類がねぐらとして利用する場所は①上沼から小張木にかけての入り江、②島周辺、③弁天橋付近、④清五郎潟などいずれもヨシ原に囲まれた場所であった（図4）。2012年度の場合、上沼から小張木にかけての入り江でねぐらをとったコハクチョウは鳥屋野潟全体の約80%であり、各年度も同様の傾向が見られた（図5、図6）。



図6. 上沼地区のヨシ原でねぐらをとるコハクチョウ

・コハクチョウは夜明け後に潟を飛び立ち、日中は鳥屋野潟南東部に広がる水田地帯で終日採餌を行い、夕暮れ時、潟に戻りねぐらをとる。厳冬期、水田の積雪量が多い時期は終日潟内に留まることが多い（図7）。



図7. 厳冬期、コハクチョウは日中も潟内に留まる

考察

・12年間の調査結果より鳥屋野潟及び清五郎潟に生息するハクチョウ数の推移及び生息状況について把握することができた。しかし年度毎に比較すると変動の幅が大きいことが読み取れる。また2001年度から2010年度まではゆるやかな増加傾向にあったが、2011年及び2012年度はそれ以前に比べやや減少傾向にあり、とくに1月以降の厳冬期は顕著であった。これらの一因として雪との関連が考えられる。ハクチョウは鳥屋野潟をねぐらとして利用し、日中は近郊の水田で採餌を行うため、採餌ができなくなるほど積雪が多い場合は、採餌可能な場所を求めて他所に移動しているものと考えられる。積雪量との関係は別の機会に考察して報告したい。また天候や積雪状況によって新潟平野内の他の湖沼（瓢湖、福島潟、佐潟など）を行き来して使い分けしているなど湖沼間に密接な関連があると考えられ、鳥屋野潟を含む4湖沼において各関係者と連携調査を継続して実施しているところである。

・鳥屋野潟の主要なねぐら場所は、北西から吹きつける強い風雪を避けることができるヨシ原の陰になる場所が選ばれているものと考えられる。特に上沼から小張木にかけての入り江には鳥屋野潟で越冬するハクチョウ類全体の80%が集結しており、最も重要なねぐら場所であることが示唆された。

謝辞

大林正人氏、大林尚子氏、村上真由美氏、田村智恵子氏には調査に多大なご協力をいただいた。また水の駅ビュー福島潟、瓢湖管理事務所、佐潟水鳥・湿地センター、五頭自然学校の皆様には貴重な情報をお寄せいただいた。お世話になった皆様に心から御礼申し上げる。

文献

- ・重要生態系監視地域モニタリング推進事業ガンカモ類調査報告 2009
環境省自然環境局 生物多様性センター
- ・新潟市鳥屋野潟で越冬するハクチョウ及びガンの調査報告（2000年10月～2001年3月）
岡田成弘、大林正人、大林尚子 2002 日本野鳥の会新潟県支部 53号

ジシギ達の行動から見えるもの

上越市 古川 弘

シギ、カモメ、タカ科の鳥達は識別が難しいとされ、故に嫌う人と果敢に挑む人達とに分かれますが、へそ曲がりな私は難しいと言えは言うほど力が湧いてきます。そのシギ科の中のタシギ、チュウジシギ、オオジシギと、その気にならないと探し出すのが難しいヤマシギ、アオシギに付いて書いてみます。

オオジシギ、ハリオシギ、チュウジシギ、タシギに付いては、外見上は皆同じのではと言うほど似ているところが、嫌われる要因ともなっているのでしょう。ハリオシギに付いては観察記録が余りにも少ないので今回は省いてあります。

上越地区から、他の地区へ出かけての観察をした事の無い記録ですので、疑問が出たり私の観察地ではこうですとの意見が有りましたら、是非ご教示して頂くと有り難いと思います。



タシギ

この仲間の観察を真面目に始めたのは2005年で、早くも8年の月日が過ぎ去っています。当地での観察で、季節的にみますと春は適していない事を、今までの観察で分かっていますので、秋に南下するのを待ち受け観察に出掛けております。

夏の真っ盛り8月中旬には、オオジシギが出現し始めます。9月に入ると、チュウジシギが飛来し、此の頃がオオジシギとチュウジシギの大きさの違いなどを勉強するのに適した季節です。9月中旬過ぎにはタシギも到着し、運が良ければ3種の違いに付いて勉強できる大切な時期となりま



チュウジシギ

す。ジシギの識別に付いては、多くの資料が発表されていますので、先に其方で勉強をされて下さい。今回は行動に着目し、そこから得た事を述べてみます。

オオジシギは名前の通り、チュウジシギ、タシギと比べて、オオジシギが1番大きいのですが、単独で観察した時には比較対象が出来ませんので、常日頃肉眼で大きさが判別できる練習をされると良いと思います。次に同じ環境で見るジシギなのですが、餌をとる場所が微妙に違い、タシギは水のある部分を好み（田んぼや水を落とした用水）、オオジシギ、チュウジシギは田んぼの縁、草の生えた農道等を好んでいます。草丈の違いもチュウジシギとオオジシギでは違って、体の大きなオオジシギは草丈の高い方を好み（25cm前後）、チュウジシギの方がそれより低い草丈を好みます（20cm前後）が、両者が重なり合う事もあります。

ジシギの季節になると、飛来しているであろうと思われる農道をゆっくりと車で走ると、ここでもオオジシギ、チュウジシギ、タシギの違いが出ます。

私が接近すると嫌がって逃げ出す順番が有り、オオジシギ、タシギ、チュウジシギと言う順番です。もちろん例外もあります。面白いのはチュウジシギは、タシギやオオジシギと違い、まず逃げ出す行動をとりません。但しオオジシギ、タシギ

と行動を共にしている場合は、群れ行動として一緒に逃げ出しますが、オオジシギ、タシギが、有る距離を逃げ去るのに対して、すぐ近くに降りてしまいます。

飛び方も種の見極めに使えます、オオジシギは重そうにゆっくりした羽ばたきですし、タシギは図鑑などにあるように、体を左右に傾けながら高く飛び去る事が多いのです。

生活する場所が微妙に違うのですから餌の好みも違い（小型昆虫等を食べるのも観察していますが食べ物調べは何時になるか?）、オオジシギ、チュウジシギは殆どがミミズで、タシギはイトミミズを主にしていますが、タシギがミミズを食べ、オオジシギ、チュウジシギがイトミミズを食べる事は言うまでも有りません。

接近できるチュウジシギですので、悪いと思い



オオジシギ 尾羽

ながらも意地悪な実験をしてみました。音については真横でエンジンを掛けても平気なので、動きに対しての反応はとワイパーを動かしてみたら、



チュウジシギ 尾羽



タシギ 尾羽

ジシギ類が警戒すると行方、尾羽をぴんと立て飛び上がる行動をとりました。少し時間を経過してから再度動かした時には反応は少なくなりました。

ヤマシギ、アオシギの警戒信号についても書いてみます。5種共が同じ行動をするという事が分かったのは2011年3月27日のアオシギ観察時で、他の4種については同じ行動をとる事を既に観察していました。その行動というのは、ジシギ、ヤマシギ、アオシギは、それ以上近づいて欲しくない時に体を上下に揺する行動をとります。初めてその行動を観察したのはタシギです。その時は、ジシギ達の行動の1部と理解しましたが、タシギとの接近が余りにも近かったので、私の方が気が引け少し離れたらその行動を止めて採餌に変わりました。

その後ジシギ達の観察時には気を付けていて、その行動が始まると実験的な事を試してみた結果は、「私達に必要以上に近寄らないでの信号」である事の結論を得ました。

他の鳥で皆様も経験しておられると思いますが、鳥達から観察者に近づいて来た場合には危険信号を出さないのは何故か、これもこれから調べてみる必要がある課題だと思っています。

ジシギ達が鳴き声による伝達をするのかにも注目しましたが、逃げ去る時の、ジャーとかゲツの声意外は聞いた事はありません。チュウジシギのように、本当に近くでの観察が出来ない事にも原因はあります。ではチュウジシギはどうだかと言うと、8年間に及ぶ観察の中で2回だけ警戒音と思われる声を聞く事が出来ました。録音も録っています。2008年8月31日の事でした。その

時の様子を書きます。

2羽のチュウジシギをみつけ待機し観察していると、車の後方5m位に居たチュウジシギが、どんと私の車に向かって来ます。私から3m位の地点に来ると態勢を低くし（警戒し始めた姿勢）、それでも採餌を止めずに近づき2m位の地点に来た時に1羽が、ゲッゲッという音を発生しました。最初は田んぼのアマガエルの声と思いましたが、1羽のチュウジシギが出している声と直ぐに分かりました。慌てて録音を開始します。幸いに此方を見ながらゲッゲッを発生しながら私から離れて行き、警戒の低い態勢を解除するとゲッゲッの声も出さなくなったのです。

翌9月1日も同じ場所を訪れると、昨日の観察地より10m位離れた道路際の畔に3羽のチュウジシギを見つけました。接近を試み観察を始めると、ガッガッともゲッゲッとも聞こえる声が・・・前後の様子から警戒時の信号に違いないと考え、その場を後にしました。数羽のチュウジシギが行動を共にしている事を観察するのは結構頻度は低いので、少ない観察時間では聞く事は無いのだろうなと考えた出来事でした。

ヤマシギ、アオシギに話題を変えますが、この2種に付いては意外と探すのが面倒です。アオシギは冬鳥として山地や丘陵地の溪流畔に渡来するが、多くないと図鑑等でも書いてある通りです。積雪の多い当地では数カ所で越冬しているのは確認しています。真冬の観察でしっかり観察出来たのは、2011年3月27日に山地の水を張ってある田んぼで観察した時です。この時の観察でアオシギも、近寄って欲しくない、体を上下に揺する行動を行いました。タシギと一緒にしたがタシ



オオジシギ

ギも同じ体を揺する行動をしていました。アオシギ、タシギ共に、イトミミズを食べていました。

ヤマシギは秋のタカの渡りを観察していた頃、上牧林道で良く観察できる事がありました。林道脇の落ち葉が多く集まった所で、ミミズを探し食べていました。前日、台風通過で大荒れだった翌朝の暗い時間帯に、上牧林道を走っていて10数羽もまとまってヤマシギが居るのを観察したこともあります。ヤマシギは平場でも観察できます。市街地の竹林のある大きなお屋敷で出会ったことも数回ありました。積雪に覆われてしまう頃は、湖沼の湿地状の場所をしっかりと探すと潜んでいるヤマシギに出会う事もあります。

秋の鳥たちの移動時に、一寸した林道にも現れ、餌取りの様子や、「近づかないで信号」の体を上下に揺する行動を観察できる事もあります。

新たな土地での鳥達との出会いを求める事も楽しい事でしょうが自分のフィールドを熟知するのも良い鳥見と私は思っています。<<< 古川 弘 >>>



アオシギ



ヤマシギ

新潟県野鳥観察図鑑 vol.4

クマタカ (*Nisaetus nipalensis*) 英名: Mountain hawk-eagle

1. 新潟県のクマタカ

県境に連なる深山から平野に隣接する低山丘陵まで主に起伏のある山地森林に周年生息するが数は多くない。佐渡島でも生息が確認されている。下越地方では繁殖の観察例が増加しつつある。



マムシを捕まえて飛ぶ成鳥、鷹斑模様が明瞭



翼をやや閉じて谷を飛ぶ幼鳥、下面は成鳥より白さが目立つ

を費やして観察を続けることが出会える確立を高める。雌雄のつがいは周年同じ場所に生息し、冬季は様々なディスプレイを行う。夏季に巣立った幼鳥は翌春までは親鳥のなわばり内に生息する。成鳥に比べ警戒心が薄く、遠くまで聞こえる声でよく鳴くため、成鳥に比べ見つけやすい。

文献：新潟県鳥類目録 日本野鳥の会新潟県支部
渡部 通 クマタカのフィールドから 支部報 60号

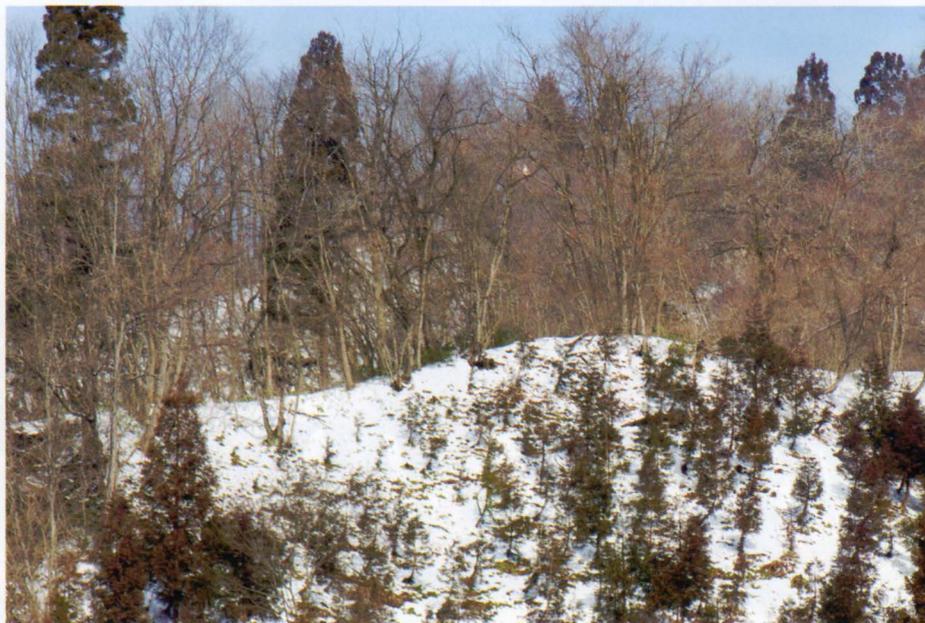
(写真・解説 岡田成弘)

2. クマタカの特徴

翼開長は雄が約 140 cm、雌は約 165 cmであり、山地で観察されるワシ・タカの仲間ではイヌワシに次いで大きい。翼は極めて幅広であり、下面は白っぽく見える。幼鳥はさらに白色味が強い。冬季は類似種の手クマがないため識別しやすい。

3. 観察方法

森林で生活するため葉が茂っている夏期は観察が難しい。落葉後の晩秋から冬期が最も観察に適している。待ち伏せ型の狩りを行い、すり鉢状の谷を見下ろせる木に止まっていることが多い。日中、谷から上がる上昇気流に乗って帆翔する姿は比較的に見つけやすい。1日のうちで飛翔する時間はわずかであるため、短時間の観察であきらめずに1日



クマタカと生息環境 (写真中央上部: 木に止まり獲物を探すクマタカ)

平成 25 年度総会・ 笹ヶ峰探鳥会

6月1日(土) 妙高市杉野沢五八木荘にて平成25年度総会が開催されました。

研修会では「イヌワシの飛翔行動」について佐藤吟一氏から発表があり、石部久会長からは「山地森林の鳥類群集と生態」について講演がありました。

翌6月2日(日)は4時30分から笹ヶ峰県民の森で27名参加のもと探鳥会が開催されました。出現種：カワウ、ホシハジロ雌雄(清水ヶ池)、キジバト、アオバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アカショウビン、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒバリ、キセキレイ、ヒヨドリ、モズ、コルリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、キクイタダキ、オオムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、アトリ、イスカ、ウソ、イカル、ニューナイスズメ、ハシブトガラス、以上40種。探鳥会終了直後にハチクマ2羽とサルの群れ。



ドイツウヒの実を採食するイスカ

イスカの群れ(18羽)がドイツウヒの樹上で実をついばむ様子を全員が観察することができ、雄のオレンジ色がとても印象的でした。

天候にも恵まれ良い探鳥会となりました。

(事務局)





シラカバ林



笹ヶ峰牧場でタンポポを食べるサル



落ちていたリスの巣を調べる



囀るキビタキを観察



アカアシチョウゲンボウ 成鳥 H25年5月3日 田上町
5月の連休中に田上町に出現。すぐ抜けるだろうと思っていたら5日まで滞在。電線にとまっては田んぼや草原の昆虫類を捕食してました。ただ尾羽の擦れ方が異常でした。もしかして籠抜け？みなさんはどう思われますか？

撮影者 田上町 江川浩之

セイタカシギ H25年4月4日 柏崎市城東
ただ、ただ、うらやましい足の長さです。

撮影者 柏崎市 小林成光



アメリカウズラシギ H25年8月25日 見附市
見附市の高速道路近くの水田にて。

撮影者 田上町 江川浩之



ミゾゴイ H25年8月11日
弥彦神社の近くに、まったく逃げない変な鳥がいたのでスマートフォンで撮りました。ボケていますが、何の鳥でしょうか？

撮影者 柏崎市 久保田彩（一般者）

発行 2013年10月31日 No.76
 発行人 石部 久 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
 事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号
 TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002